

竹村信治著 『言述論——for 説話集論』を「読む」こと

中村 春作

Shunsaku NAKAMURA

I

竹村信治氏の手になる文字通りの大著である。本文六二七頁、

ポイントと落として随所に書き込まれた補注をも含めれば、四百字詰め原稿用紙換算で優に二千枚を超えるであろう本書の自身は、その外貌同様、まことにずっしりとした、読み応えのある内容のものとなっている。決して「一気に読める」ものではなく、また、巻頭のいわば氏の「方法序説」から巻末の国語教育における実践論まで、文学研究の現代理論を援用しつつ細部にわたって書き込まれた本書の内容は、その記述のあり方と共に、相当に難解な書であるといってもいいかもしれない。ただしここに難解と評するのは、議論が交錯しての難解という意味ではない。ここで「難解」と評するのは、本書で多用される「宙づりになる主体」とは一体何か、ここでいわれる「読書」とはわれわれが普通に行っている「読書」と同じなのか、それとも異なるのか、「物語」を「物語り」、「読む」ことを繰り返して、われわれは結局どこに行き着こうとしているのか、といった難題を読む者自らが身に引き受けて考えざるを得ないという意味

でのことだ。

問題構成という面から言えば、本書の構成はむしろきわめて明快であり、本書における議論の軸は一貫してぶれることがない。それは、われわれにとつて、そして中世の人々にとつて「物語る」とは一体いかなる営為であるか（あったか）という、著者の切実な問いかけに集約される。本書を通じて著者の関心は、あくまでも「物語行為」そのものであり、「そこをこそテキストの表現性が発現する局所と観じ、テキストから析出される発話の言語行為過程の様態にそくしてテキストのそれぞれの表現性とその位相を批評しようとする」（四頁）ところにある。本書に展開される分析はその対象も多様であり、手法も多岐にわたるが、問題関心の所在は一貫してそこにある。書名となっている「言述」という用語について氏は、その用語が、話者を現実世界と絶えず連結する「物語行為」の「一回」性をよりよく象徴するものであるが故に用いるのだとしている。であれば、氏において本書もまた、一つの「一回性の読み」の実現であり、

それはまた読む者、主体の絶えざる生成・変容の場面で、永遠に意味をずらし続けて生成され続けるものとしてあるのであるうか。とまれ、本書に一貫する「物語るとはいかなる行為か」「読むことはいかなる主体化か」といった問題意識のありようこそが、そして、そうした問いかけを通じて「言述分析を人の存在性をめぐる議論へと架橋」(二二四頁)しようとする氏の批評精神の展開こそが、本書の真骨頂であり、それがまた、言説の系譜学として思想史をとらえ直し、閉じた「国民の物語」としてではなく、他者との対話を可能にする「場」としての思想史研究の可能性を考えようとしている評者にとって、関心を抱かせ、大いに刺激を受けたところであった。

■ 二

そもそも評者にとって、中世文学は長らく近寄りがたい領域であった。正確に言えば、文学方面に限らず日本中世史に関わる議論は、どこか近寄りがたい思いのする領域であった。中世文化は、他とは異なる独特の時代性に刻印されており、そこへの共感なり問題意識なりを持つことなしには、容易に接近しきれない憾みを抱いていたからである。もちろん一読者としての関心がこれまで無かったわけではない。戦前の研究はさておき、網野善彦のアジール論、王権論から近年の阿部泰郎、山本ひろ子らによる先鋭的議論、あるいはまた黒田日出男の『一遍聖絵』に対する図像解釈学的な絵巻物研究等に、評者も人並みに関心

最初に断っておけば、評者は文学研究の専門家でもなく、近古、中世を専門領域とする者でもない。それゆえ以下に記すことは、ほとんど素人の感想を超えるものでなく、多くは見当違いのものである。専門家からすれば本書の価値とは無縁のところでの勝手な感想であるのかもしれない。ただ、上に著者の言を引用して確認したように、本書の問題構成が「語り」と「読み」の相互交渉、「語り」の多層的な成立といった地点にあるならば、その本来「開かれたテキスト」という性格に即して、このような一部外者の外的発言もまた、「物語」本来の必然的な逸脱として許容されるのではないか、といった甘えとともに、以下、雑感めいた読書ノートを記すことにしたい。

II

は抱いてきたし、それらから多く蒙を啓かれ知的刺激も受け続けてきた。ただ同時に、中世の思想・文化は、たしかに興味をそえられる不可思議な言説空間ではあっても、そこと自らとの間の連絡の切実性が未だ十分に見えない世界として、懸隔があったのも事実である。中世の思想・文学が独自の宗教的世界を背景にしていることに加えて、それらに対する研究成果やその手法もまた、それぞれどこか秘教的雰囲気や漂わせ(ているように評者に思われ)、かつその叙述が多く難解であることも、評者に一種近寄りがたさを感じさせる原因であった。博引旁証でありつつ現代の関心事がそこに読み込まれる議論の流れや、

図像や口頭伝承、芸能等、狭義の「テキスト」以外の素材を自在に取り込んでなされる議論のあり方に、敬服しつつもどこか名人芸的要素をそこに感得してもいたのである。本書において多様に展開される分析手法にもまた、それに類似した感想を時として抱かなかつたわけではない。しかしながら、本書が評者を何よりも引きつけるのは、多様な分析手法や素材の導入によりつつも、著者が常に、物語の「語られ方」、テキストの多様な位相での生成過程に収斂させて、問題の局面を明らかにしようとするその論述の姿勢である。それは確かに、今日的状況を生きたる研究者が中世文学や思想に対処する、新鮮、かつ真摯な接近の仕方を示すものであり、評者自身未だじゅうぶんにその主旨が了解できていない憾みは残るにせよ、中世の物語世界を論じることが、今のわれわれの「語ること」を通しての自己認識や「対話」の可能性にも通じる課題として、おぼろげながら見えてきたのである。

ところで本書は斯界の人々にどのように評価されるのであろうか。評者は文学研究の世界に全く疎いので、これはただの想像ではないのだが、思うにそこには、二通りの評価が現れるのではないだろうか。一つは、素材そのものから遙かに飛躍して、西洋ポストモダン風の分析用語をちりばめた、才気あふれる著述として、もう一つは、新風味を出しつつも、実は個別原典の内在的分析を着実に積み上げた、作品分析の重厚な蓄積物として。……こうした批評が実際に出てきそうな気が評者にはしているのだが、もし仮にそうした批評が現れるとしたら、そ

れらとはともに、本書の意義を見誤っているだろう。たしかに序説部分で特に展開されるように、バフチン、フーコー、ブルデューらからの多様な引用や、それら独特の用語使用から構築される本書の記述は、ポストモダンのものである。あるいは、「物語る」こと、「読む」ことのいわば練習題として展開される『百座法談』、『徒然草』、△釈尊伝▽、等々の多様な個別文献への解剖的批評は、抽象的議論を他方から裏付ける地道な「論証」のようになり、一見見える。しかし、それらは本当に古典的な意味での「実証」として展開されているのだろうか。そしてそれはたぶんそうではないのではないか。そう評者には思われるのである。

その意味で、中世文献に即した分析的議論の場面で、氏によつて繁多なまでに列挙され、本文中に書き込まれる先行研究・解釈の群れは、多分に著者の戦略の産物なのではないか、とさえ評者には思われるのである。すなわち、古典的な意味での「実証」としてではなく、まさにその多様な解釈の群れが示すように、「読む」ことが多様にずれつつ展開する姿をまさしく実態として示し、また自らの解釈、テキストへの介入も、それ自体一つの実践的な問いかけ（「一回性」の）であることを目の当たりにさせる戦略としての……。これは、あるいは的外的の穿ちすぎの意見であるかもしれない。しかし氏の為すテキスト生成の「実証」がいわゆる「考証」とはひと味異なるものであることは、何よりも明らかだ。本書とほぼ同時に出版され、内容的にも本書と一見類似する章立て（「作為の交談」「今様と音楽の王権」「発心と遁世へのいざない」「雑談の時代」等々）を

有し、ほぼ同時期の文献の歴史的成立を論じる五味文彦著『書物の中世史』（みすず書房、二〇〇三年）におけるテキスト生成の「考証」と、本書における実証とは、交差しそうに見えて実は交差しないのもののように見える。本書におけるテキストの生成過程とは、歴史事実に「考証」されることで事実と認定されるような問題ではなく、むしろ、テキスト内部における「主体」の生成や、それを「語り」「読む」者（場面）に「実現」する「出来事」の問題であるからだ。へ「語る者」「読む者」の間に成立する「真実性」にかかわる問題であるからだ。

かつて氏の『伴大納言絵詞』論に対して歴史学者、黒田日出男は「研究史をふまえない文学的な読みに過ぎる」といった趣旨の批判を為したことがある（黒田日出男『謎解き 伴大納言絵詞』小学館、二〇〇二年）。今回、本書にあらためて収められたその議論を見るに、ここでは、黒田のその批判をじゅうぶん承知したことが暗示されつつも（しかしながら黒田説に説き及ぶこともなく）淡々とテキスト分析が提示されている。そこに明らかになるのは、黒田の言う「真実」と、竹村の言う間―テ

■ 三

氏は本書末尾の「附論」で古典教室のありかたを論じ、源氏物語に関するある鼎談でなされた小嶋菜温子の発言、すなわち、教室での指導においても「読み手としての私のモラル」を抜き去ることができないとする発言に注目し、「全面的な賛意」

キスト的に生成される「物語」の真実性との間の差異であろう。もとより評者に、『伴大納言絵詞』中の、いわゆる「謎の人物」が本当は誰であるかを判断する能力が無い以上、黒田説と竹村説のいずれを正、いずれを否、と評価することはできないし、またそうしたことにここで関心があるわけではない。ただ、ここで評者に了解されるのは、テキストの内部において、またそれを「語り」「読む」の言説空間においてその「謎の人物」が誰と比定され得るかという知的介入と、実証的に具体的人物を当てはめていく歴史家の作業とは、別の次元の問題なのだろうということである。そして本書の著者にとつては、テキスト空間の中に生成され、「物語ら」れ、「読む」ことを通じて、われわれの中に継続的に生成されることがこそが課題なのである。そしてそこに氏は、今日「物語」に接するわれわれの側の、いわば倫理的な「問い」をも込めるのである。「語る」「読む」という営為は、そこまでわれわれの現存在の在りように切実に関わる問題として、著者に意識されているということであろう。

II

を表している。そしてそれが氏にとつても、「言説論」からの「必然的な展開」であるとも述べている（五五八―五六一頁）。本書ではさらにその議論をふまえて、教材としての竹取物語論が展開されるのだが、そこにおける氏の議論は、「読み手のモラ

ル」を「言述論」の立場から明確に示すものであるとともに、小嶋の方法とも異なる、氏独自の「言述分析を人の存在性をめぐる議論へと架橋」しようとする立場を鮮明に示すものとして、評者には感得される。では一体、氏のいう、「言述論」からの「必然的な展開」としての「読み手のモラル」とは、どのような事態を指して言われるのか。

「物語」分析における視点を共有し、そこに「読み手のモラル」の問いかけを自覚することを共有しつつも、いかにそれを自覚化していくかという場面で小嶋と竹村は、それぞれ異なる地平からそれを問題化しようとする。「それ（源氏物語）を包みこむ大きな差別構造があり、差別表現があることを認定したうえで、その差別構造を物語がどこまで否定していったり、覆したりしえたかを問うていかねばならない。言説内容と言説のあり方のほうからモラルを問いただしていくべき（小嶋）」（五六一頁）とする地点から、物語のモチーフを支えた制度を無自覚に読むことで、それをさらに上塗り、再強化しかねないわれわれ「読み手のモラル」を問題化する、小嶋菜温子の竹取物語分析（「かくや姫幻想―皇権と禁忌」新装版）森話社、二〇〇二年）が、物語の「語り」を内から構成する権力性を、民俗学を援用してのメタファーやモチーフの分析から導き出し、たとえは「王権の根源的な外部性、王権の内なる異化のまなざし」を浮き彫りにするかたちで、無自覚な「読み」において、今日も竹取物語的ハあわれVを再構成しつづける私たち内部の「知」を撃とうとする手法によって為された竹取物語論であるとした

ら、竹村の「読み手のモラル」への問いは、「読む」ことそれ自体のプロセスに内在する問題として把握される。氏の「読み手のモラル」論は、竹取物語を「かくや姫の親としての竹取の翁の物語」としてとらえ、その「すき心ある翁」の「情欲と世欲との間で宙づりになっている表情」の確認、そしてそのように描くことでなされたテキスト内での批評精神（テキストとしてそのように発現していることの認識）、さらにそれを「創造的契機」によりつつ新たに読み直していく読者における書物との対話、といった三層の場面で「語ること」読むことのモラル」が問われるような、そのような出来事として展開される。

ただし、その意義が学習者（＝現代のわれわれ）のものでもあるためには、テキストの「清新な魅力と豊かな創造的契機」が学習者（＝われわれ）それぞれの現在において発見されなければならない。そしてその発見のためには、テキストの問いかけを引き受け、テキストの提示する応答を正確に理解した上でこれと対話し、応答していく場面が用意されなければならない。自分たちは「人間の存在性」をどう考えるのか、テキストの描き出す人間たちの姿はわれわれとは無関係のものか、われわれは「宙づり」ではなのか、「色好み」のハすき心Vを主体化する「言説をなぞりつつ生きる」とはわれわれの場合でいえるどのような生きることなのか、われわれは有限の生を運命づけられた存在として自らの存在を考えているのか、そうした人間の存在性を考える時のありうべき人間関係（親と子、男と女）を

われわれはどう考えるのか、テキストの提示する関係は成り立ちうるのか、それは日々の暮らしの中で他者どう関わり合うことなのか……(六一二頁)。

展開される「物語」内部での他者との対話の発掘、テキストとテキストを構成したであろう外部世界との対話の痕跡、今現在、テキストに対する読者の自らを取り巻く世界との対話とテキストの読みから生成される対話、そうした幾重もの「他者との対話」の場面を設定した上で、そこにおいて鍛えられる「モラル」こそが論じられるのである。そしてそうした問題意識こそが、本書を通じて繰り返し表明されるものである。少々長くなるが、著者の立場が鮮明に示された重要な箇所を引用しておく。

テキストの表現は、いつも、その生成の言語行為がいとなまれた時空の言説状況とともにある。そしてそうした言説状況のなかにある言語主体の、いずれかの言説に同調したり対抗したり、あるいは宙づりのままいくつかの言説間を往還したり、逸脱、越境、超脱したりする言語行為をもつて、テキストは生成する。だから、テキストの表現性をめぐる批評は、この言説状況のなかでいとなまれるテキスト生成の言語過程(＝言述の様態)、そこで行為性(何が取り上げられ、いかなる言説とかかわり、どのようなことが行われているのか)、出来事性(何がテキスト生成の前に／さなかに／後に起こっているのか)にそくして試みられなければならない。これが稿者の立場である。

もちろんこの立場も、批評自体がひとつの言語行為としてある以上、評者の現在からする言説状況分析、そのもとでのテキスト分析といった限界をまぬかれることはできず、批評行為をとりまく言説状況と無縁ではありえない。したがって、生成の場におけるテキストの表現性へとむかう批評主体の志向は、つねに、生成の現場から遠くはなれた場所での恣意的な想像(創造)営為として実現されるほかはない。けれども、あえていえば、そうした地点でのそうした営為が、生成の場の言語過程(＝言述の行為性・出来事性)への志向との拮抗をもつていとなまれるかぎり、批評行為は、生成の場と批評の場を往還する地平をつくりだし、批評主体をそこで宙づりにし、二つの発話主体をその内部にたちあげ、両者の対話を発現させ、これを通じて二つの言語場、二つの世界が二つながらあぶりだされることで、これらとむきあう批評主体に人と社会をめぐる問題領域を発見させ、あらたな思索と認識の場を提供する、そうした可能性をもちうる(と信じたい)。しかも、かかる可能性への信頼をもつてする以外には、批評という行為が、評者によるテキストの自己化、自己所有、もしくはテキストをもつてする自慰行為あるいは自己顕示をはなれた場所を確保しつつ、その意義をもちうることはありえない(四八九―四九〇頁)。

ここに「宙づりのままいくつかの言説間を往還」し、「逸脱、越境、超脱」的言語行為を繰り返し、そのことよって生成さ

れるテキストとは、まさしく本書の著者の「読み」の在り方でもあり、また本書の本質でもあろう。その意味でここには、著者の言いたいことが、集約的に示されているように感じられる。テキストをそのようなテキストとして構成したであろう「主体」の在りよう、テキストに対峙する「読者」の在りよう、その「読者」のテキスト理解を成立させるものとしての、自らと自ら

を囲繞する生活世界との間に発生する「主体」の在りよう、それらに相関されつつ現に今在る者として、われわれは「物語」に対し、世界に対し続けているということだろうか。つまるところ、そうした「問いかけ」を自らの課題として考えさせられる契機として、評者はこの書を「読んだ」のである。

（竹村信治著『言述論—その説話集論』笠間書院、二〇〇三年）